不器用な恋人

ｅｍｉ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
不器用な恋人

【Ｎコード】
Ｎ９５４７Ｒ

【作者名】
ｅｍｉ

【あらすじ】
私が命を捧げた人は決して私のものにはならない。彼にとって私はただの世話役なのだから――――――。愛してはいけない人を諦めるため逃げ続ける彼女と、彼女に枷をつけ続けることで引き止めようとする不器用な男の身分差物語。※３／２３不具合が生じたため、やむを得ず掲載分削除しました。加筆修正後、順次再掲載していきます。詳しくは活動報告にて。

プロローグ

私がこの世に生を受けまもなく、私は私のものではなくなった。

この命も、感情も、すべてを捧げたのだ。

そう、私が母のお腹から誕生しその1時間後に同じ病院で産まれた彼に。

けれど、私は彼のものだが彼は決して私のものにはならない。

彼が触れたものはすべて彼のものになるが、それに私が触れることは許されない。

彼の声はすべてを動かすが、その声に私の声を重ねてはいけない。

彼と私の本当の関係、それはイトコ同士。

彼はとびきり一等級の血統書付き。

私は・・コンプレックスだらけの落ちこぼれ。

その格差は雲泥、月とすっぽんだ。

だけどすっぽんは時々夢を見る。

一度でいい、月に触れたいと。

決して叶わない夢を。

【1】　存在の意味

日本有数の大企業、高遠グループの御曹司・高遠　悠月

結婚８年目にしてようやく授かった彼をおじ夫婦はもとより親戚一同それはそれは大切に育て上げた、まさに高遠家の宝である。

おじ夫婦どちらにも似ないその整いすぎた完璧な容姿は、彼が唯一無二の証。

生まれ持った素質と品格そして他を圧倒する存在感、若干１８才にしてすべてを兼ね備えた、まさに王者になるべくして生まれた男である。

そんな高遠家でおじ様の秘書として働いてるのが、私の父。

代々高遠を敬い仕える桧山の家に生まれた父は、小さい頃はおじ様の遊び相手として、今ではおじ様の右腕的存在としておじ様を支えている。

桧山にとって高遠は、命を捧げる相手でもあった。

そしてそんな桧山の血を持つ父と恋に落ちたのが、おじ様の実の妹

である母であった。

正真正銘高遠の血が流れる私の母は、周囲の大反対をものともせずあっさりその名を捨て、桧山に嫁入りを果たした。

当時、父と母は周りから相当な誹謗中傷を受けたらしい。

そんな訳あり2人の間に生まれた私、桧山　春花は、当然親戚一同から笑われ者の存在である。

けれど、高遠と桧山どちらからもいらない存在の私に両親以外で唯一やさしくしてくださったのはおじ夫婦だった。

おじ様はただ同い年というだけで、私に悠月様の遊び相手役を授けてくださったのである。

【2】　王子様と世話役

小中高一貫教育校である、九条学園。

ここは上流階級家庭の子息子女のみが入学を許可されることで有名な、歴史ある超セレブ校である。

高遠の親族は代々この九条学園への入学が義務づけられている。

高遠と九条学園の縁は深くそれ故に多額の援助をしており、今や学園の経営は高遠で成り立っているといっても過言ではなかった。

特に今現在、在学中であり高遠の跡取りでもある悠月様には、例え学園長でさえも頭を下げず前を通り過ぎることは不可能である。

「おはようございます、悠月様」

九条の制服に身を包み高等部の廊下に足を踏み入れた悠月様の姿に、その場にいたすべての生徒は道を開け、一斉に頭を下げた。

この学園にとって高遠の、そして悠月様の存在は絶対的である。

一目彼の姿を拝見しようと多くの女子生徒は毎日朝早くから列を作

り、彼が目の前を通り過ぎればその完璧な容姿と放たれるオーラに皆一様にため息をもらした。

悠月様が九条に入学して以来かれこれ１０年以上続く、もはや朝の恒例行事である。

そして昂然と先頭を歩く悠月様の後ろにはいつも、高遠の親族で悠月様の補佐役である翔様と、彼のお世話役として仕える私が続く。そのまた後ろには３人のボディガードが従えていた。傍から見ればまるで時代劇の行列奉行のようだろう。

あえてひとつ疑問の声を上げるならば、悠月様の背後になぜ翔様だけではなく、誰がどう見ても平凡で地味な女子生徒（つまり私）がまるで金魚の糞のごとくくっついているのか、そのことに尽きる。

しかし九条学園の生徒は当然、悠月様情報を網羅しており、私が悠月様のイトコであり彼のお世話役である事実はとうの昔に知れ渡っている。

そのため、幸いにも女子生徒からの嫌がらせ等問題も起きたことはなかった。

問題は起きないが、私がこの学園の生徒であること自体はすでに問題だろう。

だってうちは世間一般のサラリーマン家庭で、こんなセレブな学校に通えるなんてまず有り得ないのだから。

これもひとえにおじ様が私をこの学校に通わせてくださるおかげだ。

「それでは悠月様。帰りの時刻にまたお迎えに上がります」

悠月様に深く頭を下げた翔様は、隣である自分の教室に去って行った。

悠月様と私のクラスは1組、そして翔様は2組に在籍している。

不思議なことにこれまでほぼ毎年繰り返されてきたクラス替えでも、悠月様と私のクラスは変わらない。

ついでに席も隣同士である。

これもすべて、おそらくはおじ様のご配慮なのだろう。

やはりお世話役は常に主の傍にいなければ意味がない。

・・・まったく役に立たない、名ばかりでも。

そもそも、まったくそつのない完璧な悠月様に世話役など必要なのだろうか・・？

「今日は帰りそのまま会社に顔を出す。春花、お前も一緒だ」

「・・は、はい。悠月様」

颯爽と教室に入って行く悠月様の後を慌ててついて行く。

既に教室に入っていた多くの生徒が悠月様の存在に気づき、そして

一斉に頭を下げた。

『春花、お前は悠月様に命を捧げたのだ。悠月様のために生き悠月様のために死になさい』

幼い頃から呪文のように繰り返された父の言葉。

私の命も、この感情も、私のものではない。

身体に流れるこの血一滴さえもすべて、悠月様のものだ。

【3】　温かい手

私がおじ様から授けられた、悠月様の遊び相手役という名誉。
それは私がまだ3歳にも満たない頃のことだったと後から聞いた。
その使命を全うするために両親のもとを離れた私は、九条学園に入学するまでの長い期間、高遠の屋敷で暮らすこととなった。

――――今でも忘れない、思い出せば微かに胸が締め付けられるような息苦しさ。

私は見事に、高遠家の厄介者だった。

訪れる高遠の親族達に疎まれ続けた現実。

その原因は、むろん私の身体に確実に流れている桧山の血だった。

高遠の血筋を汚す私の存在に、露骨に目を背ける親族達からの冷遇。

けれど幼い私は自分の生まれた境遇など知るはずもない。

周りから嫌われる現実に幼い私がたどり着いた答えは、ただ自分を

責める続ける毎日だった。

だって、私は役立たずだったから。

幼い頃からすべてにおいて完璧で頭の良かった悠月様。

比べて、言葉も乏しく何をするにも行動が遅い鈍間な自分。

当然、悠月様の遊び相手にはなれるはずもない。

どうしておじ様はこんな私を悠月様の傍に置いたのだろうか。

悠月様には私の他に何人も年の近い従兄弟がいるのに。

優秀な翔様だっていらっしゃったのに。

悠月様にとって、むしろ足手まといでしかない私。

皆に嫌われるのも当たり前だ。

どんなに頑張ってもうまくできない自分はこの家には必要ないのだろう。

役立たずの私は、これ以上悠月様の傍にいてはいけないのかもしれない。

おじ様がいつ、こんな私に愛想を尽かし追い出されるのか。

ビクビクと怯える毎日に、私はひとり隠れて泣いた。

けれど、そんな私をいつも許してくださったのは悠月様だった。

『春花はいつも傍にいればいい』

誰もいない場所でひとり泣く私を真っ先に探し出し、その温かい手で私の涙を拭いてくださった。

私が転べば汚れることも厭わず、その背に私をおぶってくださった。

言葉で表せない私の思いを、私のかわりに言葉にしてくださった。

悠月様は私に居場所を与え、いつも底のない優しさで私を包んでくださったのだ。

父はそう言った。

悠月様のために生きよ、と。

本当は言われるまでもない。

私は自ら、悠月様に命を捧げた。

彼の為に生きそして死ねるなら、私は世界一の幸せものだ。

【4】　突然の嵐

日曜の午後。

昨夜、私は悠月様に今日の午前中は自宅で休むことを指示された。

基本、私の生活に休みは存在しない。

常に悠月様に従いお世話をさせていただく、それが悠月様の遊び相手役を終え、後におじ様に授かった私の任務だった。

悠月様の突然の言葉に、多少不思議に思いながらも、結局そのご好意に甘えさせてもらうことにした。

午前中ひとり自室で過ごした私は、昼が過ぎ高遠に向かうため1階に降りた。

リビングにいるであろう両親に挨拶するため、その部屋に入る。

なぜか張り詰めた重苦しい空気を身に感じたのは、正装をした父と母がそこにいたからだろうか。

「これから高遠に出向く・・春花、準備をしなさい」

苦渋の表情を浮かべた父の声は、固く強張っていた。

そして、父のその一言が今後の私の人生を決めることになる。

ソファから立ち上がった母は、その場に佇み戸惑いの表情を浮かべる私を鏡台に座らせた。

急いで私に化粧を施し、肩につく髪をひとつに結い上げ飾りをつけた後、すでに準備されていたのだろうその着物を手馴れた手つきで着せていった。

目の前に膝をつき、私を見上げる母の瞳が切なく揺らいでいる。

「春花・・もう少しだけでも傍にいてあげたかった」

「・・お母さん？」

意味もわからずただ動揺するばかりの私を引き連れ、私達3人は高遠の門をくぐった。

待ち構えた高遠の使用人に案内され、辿り着いた奥の部屋。

おそるおそる足を踏み入れた私に待っていたのは、穏やかに笑う高遠のおじ様とおば様。

そして、同じく着物に身を包んだ悠月様の姿だった。

思わず立ち竦んだ私が促され座ったその場所は、何故か悠月様の向かいの席であった。

「これより高遠家、桧山家の結納の儀を執り行わせていただきます」

突然、自分の耳に飛び込んできたその言葉に、一瞬身体が固まった。

・・・・結納？

誰と、誰が？

今この状況にまったくついていけない私の頭はグルグルと混乱し、思わず救いを求めるように目の前の悠月様に視線を向けた。

彼の漆黒の双眸は何の感情の色もなく、ただ私の瞳だけを射抜くように見つめていた。

・・その時、ようやく気がついた。

意味もわからず連れて行かれ突然執り行われたこの結納の当事者は、目の前に座る悠月様だと。

そして悠月様のお相手は、まぎれもなくこの自分であることを。

【5】　逆らえない命令

「・・・一体、どういうことなのでしょうか」

ただ1人呆然と座る私を残し進められた、結納式。

ようやく終わりの時を迎えたその足でぐらぐらとふらつく身体を引きずり訪ねた場所は、すでにそこにいるであろう悠月様の部屋だった。

迷わずここを訪れた理由はひとつ。

私の意思なく進められた突然の結納の、その訳を知るためだ。

着物を脱ぎすでに普段着を纏った悠月様は、窓際の椅子に深く腰を下ろし背後に佇む私の問いに答えることなく、薄暗くなりつつある窓の外を見つめていた。

今自分が佇むこの場所から、彼の表情は一切見えない。

いや見えたとしても、おそらく今の私に彼の心情などわかるはずないだろう。

「・・悠月様は、今日のことをご存知だったのですか？」

不安だけをのせた再び問う私の声に、悠月様はようやく振り返りその顔を見せた。

感情のない、ただ自分を傍観するように冷静な瞳だけが私の姿を捉えた。

「今日のことは俺が決めたことだ」

彼特有の低い声で発せられた短い言葉は、私の頭に強い衝撃とともに混乱を与えた。

・・・私は、からかわれたのだろうか？

彼は笑えない冗談で人を傷つけるような方ではない。

けれど今、目の前の起きたこの現実だけは、信じられるはずがなかった。

思わず動揺する心を抑え、落ち着かせるために震える息を吐いた。

「・・・私は役不足ながらも、悠月様のお世話役として仕えさせていただいてます」

「だから何だ」

「それだけの私が、悠月様のお相手になれるはずがありません」

震える声が私の心情を表している。

自然と滲み出る涙を必死に押さえ、ようやく言葉を口から出した。

・・・もし、私の身体に桧山の血が流れていなかったら。

この夢のような現実にどれだけ歓喜したことだろう。

彼の言葉を疑うことすらなく、これから続くであろう幸せな未来だけを想像し胸をときめかせたかもしれない。

いっそ、夢だったらよかったのに。

いつか覚めるとわかっていてもその瞬間だけは、すべてを忘れられる。

何の迷いもなく彼の胸へ飛び込めるはずだから・・・・。

「お前が俺に逆らうことは許さない。・・・これは命令だ」

【6】　見えない心

「命令」

それは悠月様が私に対して初めて使う言葉だった。

悠月様の声はとても静かで何の感情も含まない、ただぞっとするほど私の心に冷たく響き渡った。

目の前の彼は、一体誰なのだろう。

そして、彼はいつから命令で私を傍に置くようになったのか。

遠い昔、いつも私を温かく包み込み、私の思いを言葉にしてくれた彼はどこに行ってしまったのだろう。

今、私を見つめる彼の瞳は、どうしてこんなにも冷たくて温度を感じないのだろうか。

今の私には悠月様の心がわからない。

ーーーーー彼はいつから変わってしまったのだろうか。

悠月様の留守中、高遠家の中庭に佇んだ私は目の前に広がる見事に赤く色づいた紅葉をぼんやりと眺めた。

結納の日から、すでに3日が過ぎた。

あの日以来、悠月様とは挨拶以外言葉を交わしていない。

悠月様があえて私を避けているのか、それとも私自身悠月様を前に怯え口を閉ざしてしまうのか。

おそらくどちらもだろう。

結局、悠月様と私の間には何の結論も出されてはいない。

けれど、このまま何もせず時が過ぎるのを待てば結果は見えている。

私はこれから先一体どうすればいいのだろう。

悶々とくすぶり続ける歯がゆさに、重いため息を漏らした。

「聞いたよ、悠月様とのこと」

自分の背後から掛けられた馴染ある声に驚き、咄嗟に後ろを振り返った。

「・・翔様」

視界に入ったのは、いつもの穏やかな笑顔をのせこちらを見つめる翔様の姿だった。

翔様はゆっくりと私の隣に近づき、そして横に並ぶ。

私の他に、もっとも悠月様に近い人物ーーーーーー悠月様の補佐役として小等部より仕え、そして悠月様にとって母方の従兄弟に当たられるのがこの翔様である。

「・・・・・翔様は、もしかしたら知ってますか？なぜ悠月様のお相手が私なのでしょう」

突然現れた翔様の姿に、思わず1人で苦悩し張り詰めていた胸が緩む。

彼に救いを求めるように、無意識に自分の心情を表情に滲ませてしまった。

「どうしても知りたい？」

「・・・はい、知らなければいけません」

突然悠月様が私との婚約を決めた、その理由が何なのか。

そしてなぜ、悠月様はあんなにも変わられてしまったのか。
そこに秘められた彼の気持ちを知らなければ、おそらく私はこの現実が怖ろしくて一歩も前に進めないだろう。

「春香ちゃん、僕達が初めて会った時のことを覚えている？」

「・・・・確か４歳くらいの時だと」

「そう、僕が初めてこの高遠の家に遊びに来た時、すでに君は悠月様の遊び相手だった。
・・・・正直僕はね、君のことあまり好きじゃなかったんだよ」

私からそっと視線を逸らした翔様は、目の前の紅葉をその目に捉え少しだけ目を細めた。

「悠月様にとって足手まといにしか見えない君がどうして悠月様の一番近くにいるのか、
君がいなければそのポジションは僕のものだったからね」

はじめて知る、翔様の心情

こんな私にもいつも優しく接してくださった。

高遠のことで思い悩む私の、唯一その思いを口にできた相手でもあった。

もし私がいなければ、翔様は自分の思いを全うできただろう。
悠月様の遊び相手として誰よりも悠月様を喜ばせられたに違いない。

「・・中等部に上がった年、高遠の別荘に遊びに行ったことは覚えている？」
「・・・はい」

忘れられるはずがない。

私が過ちを犯した、あの日のことをーーーーーーーー

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9547r/

不器用な恋人

2011年4月16日14時33分発行